



賛同企業・読者参加型プログラム 福島相双地域の今を知り未来を思うツアー

原発事故が影を落とす大熊町・富岡町を巡り、地域再生の願いにふれる。

ある日曜日、福島県双葉郡富岡町の海の近く、復興住宅が立ち並ぶ曲田地区の一面にある小さなカフェから、にぎやかな笑い声。ブーチを手作りしようとフェルト布地にキラキラ光るビーズを並べる女性たち。70代から10代までが参加した一日工房。豆を焙煎して淹れるコーヒーの香りが漂います。居住者が減少した複合災害の被災地は、13年を経た現在も進行中の原子力災害の現状に直面しながらも、暮らしが豊かになっています。被災体験や記憶のあるなしに関わらず、多世代の人々が、失われたコミュニティを新たに創る拠点。それが富岡町の「コミュニティカフェCha茶Cha」です。美味しいコーヒーと多世代の町民との出会いが待っています。

そして今 NPO法人富岡町3・11を語る会 代表 青木 淑子さん



NPO 法人 富岡町3・11を語る会 <http://www.tomioka311.com/>



軍や人の往来がほとんどないJR常磐線大野駅西口に建てる目黒き道



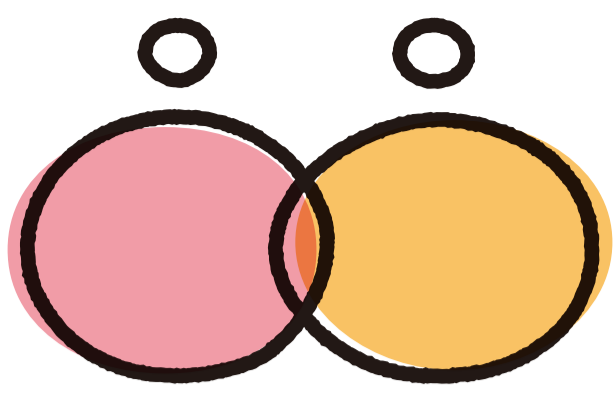
土壌汚染施設の上で測定器を使って空間線量を確認する参加者たち



とみおかワインドメアで行った鳥害対策用ネットの巻き取り作業

東日本大震災で地震・津波原発事故の複合災害を経験した福島県相双地域を訪れる2年目の視察ツアーを昨年11月4日に実施。今回は、双葉郡大熊町と富岡町を訪問しました。町の半分が帰還困難区域となっている大熊町では、新街地の基礎整備工事が進むJR常磐線大野駅西側でバスを下車。荒涼とした街並みを視察しました。放射性物質の除去で生じた8000トン超の汚染除去土壌などを2045年までに県外で最終処分するまでの間、中間貯蔵する施設も見学。双葉郡大熊町にまたがる帰還困難区域に設けられた広大な施設の一部を巡りました。また、福島第一原発から13キロの距離にある特別養護老人ホーム「ツラライ」におくまで

は、あわただしく避難した痕跡に息をのみました。富岡町では、NPO法人「富岡町3・11を語る会」の語り人、田中美奈子さんのガイドで田山さんら震災前に関与した各所を視察しました。福島第2原発を望む小浜地区の高台にある「とみおかワインドメア」は、避難指示解除前の2016年より町民有志10人でワイン用ブドウの栽培に着手。圃場栽培品種を増やし、18年にドメアを設立。スタッフの指導で、防鳥ネット格納のお手伝いにチャレンジしました。ツアー参加者の布宮義久さん（名取市）は、「女川町や南陸町とは違った復興の困難さを感じました」と感想を語ってくれました。



今できること プロジェクト

2023-2024

再生と伝承

総集編

被災地の今を知り、地域の明日を思う。

今できることプロジェクトは「再生と伝承」を掲げ、

東日本大震災の被災地域活性化に

尽力する人々や団体にフォーカス、

現地での体験を通して学ぶ取り組みを実践してきました。

被災から13年。語り継ぐべき記憶と教訓を継承する活動は

大きな共感の輪を広げながら、

地域が再生を果たす未来への期待を高めています。

2023年度は、3つのテーマでプログラムを実施。

河北新報の読者、賛同企業の方々、たくさんのご一般参加者とともに得られた成果の数々をこの紙面で報告します。

企画・制作 河北新報社

営業局（今できることプロジェクト事務局）

これまでの活動内容や新着情報は「今できることプロジェクト」特設HPをご覧ください。[www.kahoku.co.jp/imadeki/](http://www.kahoku.co.jp/imadeki/)

facebook ページもあります。

お問い合わせ 今できることプロジェクト事務局（河北新報社営業部） tel 022-211-1318



賛同企業・読者参加型プログラム 仙台市東部沿岸・名取市閼上視察ツアー

悲劇を繰り返さないための教訓と、地域に賑わいを取り戻す未来図を。

東日本大震災の発生後、国内外から多大な支援が寄せられました。アクアイグニス仙台ではその恩返しと交流促進による地方活性化を目的とした「全国御礼物産展」を2024年1月から開催。各フェアごとに、およそ2週間にわたり、各都道府県のお土産や名産品を「マルシェ・リアン」で販売します。観光PR・地元文化紹介ブースの設置、施設内のレストランで各地の食材を使用したオリジナル料理の提供なども行います。これまで、熊本県、福島県、沖縄県フェアを実施し盛況でした。5月下旬に開催予定の第4回は、鹿児島県の物産や観光の魅力を紹介する予定です。ぜひ足を運んでみてください。

そして今 アクアイグニス仙台 全国御礼物産フェア



アクアイグニス仙台の温泉棟 <https://aquaignis-sendai.jp/>



昭和8年三陸地震津波の震災記念碑前で参加者に聞かせる長沼さん



施設オープンまでのストーリーを熱弁する深松さん

2月14日、仙台市東部と名取市沿岸の浸水域を巡るバスツアーを実施。賛同企業の9社20人に加え、紙上で募集した一般参加者28人、尚絅学院大学（学生ボランティアチーム「TASKI」へ参加しました。に所属する9人が参加しました。仙台市若林区荒浜一農災遺構仙台市立荒浜小学校（2）では、元住居などの現地ガイドが2階まで浸水した校舎を案内。被災当時の映像や関係者の証言などで学びを深めた。近くの一農災遺構仙台市荒浜地区住宅基礎を訪問。津波により被災し残された住宅基礎が浸食された地形からも参加者は津波の威力を実感した様子でした。同産地「アクアイグニス仙台」では、施設を運営する仙台ローリー株式会社の代表取締役・深松努

さんが歓迎。にぎわいを創出し、地域再生の核として2022年4月に誕生した施設の背景や隣接地に整備される藤原地区海岸公園と一体で目指す地域の未来図について詳しく知る機会となりました。地区で10人が津波の犠牲になったのが名取市閼上（ゆりあざ）です。閼上中央町会長長の長沼俊幸さんには、地震発生から津波襲来、過酷を極めた避難所の実態などをお話しいただきました。「名取市震災メモリアル公園」に全員で移動後、日田川に移設された昭和三陸津波の被害実態を刻んだ震災（しんしゅう）記念碑の前に、世代を超えて災害の記憶を伝えること、備える大切さを訴える長沼さんの言葉に参加者は聞き入っていました。

ツアーに参加した神戸製鋼所の清水健二郎さんは「復興にかける人々の思いに触れることができ、自分の中で震災が風化しかけていないことに気づきました」と伝承への新たな決意を話してくれました。

次世代参加型プログラム

震災を知らない中学生が記者になって、被災地の過去・現在・未来を綴った震災伝承新聞。



多賀城高校の生徒の案内で取材した塩竈二中の中学生記者



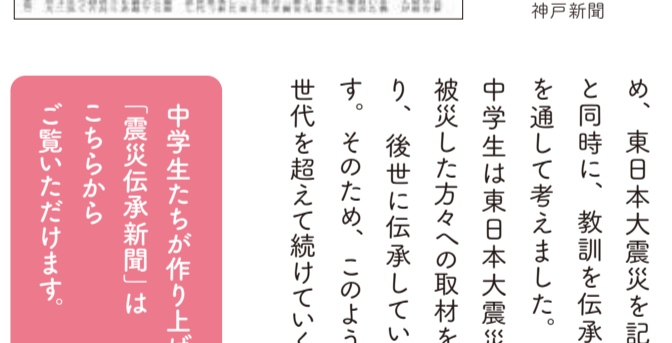
石巻市塩竈町で取材した仙台白百合学園中の中学生記者



南光台中の中学生記者と一緒に活動した尚絅学院大学の学生ボランティアチーム「TASKI」



出典 2024年3月15日付 神戸新聞



出典 2024年3月8日付 愛媛新聞

塩竈市立第二中学校、仙台白百合学園中学校、仙台市立南光台中学校の生徒23人が復興の現場で取材を行い、記者経験のあるプロジェクトメンバーによる指導の下、記事執筆に挑戦しました。取材先で感じたことや学んだことを記事にまとめ、河北新報別刷「震災伝承新聞」として2月11日に発行。その後、各校で発表会を実施し、活動成果の共有を行いました。震災伝承新聞は、宮城県内16の中学校に6万部をお届けしたほか、各地の震災伝承施設、宮城県外の災害に関する研究を行う大学や団体、東京・池袋「宮城ふるさとプラザ」、宮城県大坂事務所などで2万部を配布。愛媛県の名古屋市立南見中学校、兵庫県西宮市立浜脇中学校などで教材として活用されました。

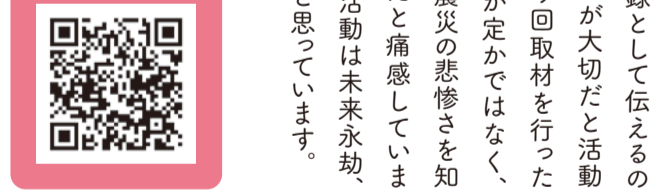
●震災伝承新聞を読んで  
西宮市立浜脇中学校 藤本凜さん  
今回の取材は、東日本大震災の記憶がない生徒たちにとって新鮮であり、刺激の多い体験になりました。震災の被害や救助活動、防災の取り組みについて学ぶと共に、ガイドをお願いした多賀城高校災害科学科の生徒たちの語り継ぐ姿から、その大切さと自分たちの役割を感じました。本校では朝読書の時に全校で震災伝承新聞を読みました。同世代の言葉は共感しやすく、その生徒も新聞を読む、発表を聞く表情がとても真剣でした。この学びが、さらなる防災意識の向上や今後の取り組みに広がっていくことを期待しています。

●震災伝承新聞を読んで  
仙台白百合学園中学校 菊地貴典先生  
今回の取材は、東日本大震災の記憶がない生徒たちにとって新鮮であり、刺激の多い体験になりました。震災の被害や救助活動、防災の取り組みについて学ぶと共に、ガイドをお願いした多賀城高校災害科学科の生徒たちの語り継ぐ姿から、その大切さと自分たちの役割を感じました。本校では朝読書の時に全校で震災伝承新聞を読みました。同世代の言葉は共感しやすく、その生徒も新聞を読む、発表を聞く表情がとても真剣でした。この学びが、さらなる防災意識の向上や今後の取り組みに広がっていくことを期待しています。

●震災伝承新聞を読んで  
川崎町立川崎中学校 追木愛叶さん  
自分と同世代の人たちのメッセージを読み、校外学習で「山元町震災遺構中浜小学校」へ行ったことが思い出されました。

●震災伝承新聞を読んで  
多賀城高等学校 畑山純音さん  
まあるきと一緒したのは、震災当時1歳だったかどうかという年齢だった塩竈市立第二中学校の皆さんでした。

●震災伝承新聞を読んで  
尚絅学院大学 山田海斗さん  
震災が風化するということは、その記憶が薄れていくだけではなく、教訓も過去の事として捉えられることを意味します。この先、大きな災害で再び悲惨な結果を招かないため、東日本大震災を記憶や記録として伝えるのと同時に、教訓を伝承することが大切だと活動を通して考えました。実際に今回取材を行った中学生は東日本大震災の記憶が定かまらず、被災した方々の取材を通して震災の悲惨さを知り、後世に伝承していくべきだと痛感しています。そのため、このような伝承活動は未来を担う世代を超えて続けていくべきだと思います。



※所属・学年は2024年3月時点

「今できることプロジェクト 2023-2024」は趣旨に賛同いただいた39の企業・団体のご支援により活動を展開いたしました。
